

令和7年度
子ども・若者の市政参加促進
に関する課題研究
実施報告書

2026年1月31日

子ども・若者の市政参加促進に関する広域連携検討会

目次

第1章 研究事業の概要

第2章 先行事例・研究の整理

第3章 勉強会

第4章 意識調査

第5章 座学研修

第6章 実証実験

第7章 本研究事業の結果に対する考察の総論



第1章 研究事業の概要



背景

令和5年4月にこども家庭庁が発足し、同年同月にこども基本法が施行されるなど、**身体的・精神的・社会的に将来にわたって幸せな状態（ウェルビーイング）で生活を送ることができるこどもまんなか社会の実現に向けて、子どもや若者の市政・社会参加が注目されている。**

三鷹市・武蔵野市・小金井市・西東京市(以降4市)においても子ども・若者向けの取組を実施しているが(参考1)、子どもの声をどのように集めるのか、どのようにすれば市政に参加してもらえるのか、そのノウハウがわからないのが現状(参考2)である。

参考1:近年の4市での子ども・若者向けの取組例

| 主催市 | 実施年度 | 取組名 |
|------|-------------|-----------------------|
| 三鷹市 | 平成27年(以降継続) | 市内学校に向けた選挙に関する出前授業 |
| | 令和6年 | 子どもの権利について考えるワークショップ |
| 武蔵野市 | 令和2年(以降継続) | Teensムサカツ |
| | 令和5・6年 | 長期計画策定委員会と中高生世代の意見交換会 |
| 小金井市 | 令和5年 | 若者MIRAIトーク |
| | 令和6年 | U30こがねい会議室 |
| 西東京市 | 令和6年 | こども会議 |
| | | 若者ミーティング |

参考2:4市職員による子ども・若者向け施策における課題/今後に向けた改善点 等のコメント

| 自治体名 | コメント |
|------|---|
| 三鷹市 | 「こういう場をもっと開いてほしい」という意見もあり、場の提供が必要である。 |
| 三鷹市 | 子どもや若者の意見を聴収するワークショップは実施したが、継続的な取組にしていくことが難しいと感じている。 |
| 武蔵野市 | 開催時期は学校のテスト期間や行事に被らないよう調整し募集時点で年間予定を示すことが重要。 |
| 武蔵野市 | 政策提言という固い感じではなく、気軽に意見が言えるベースを創りたい。 |
| 武蔵野市 | 無関心層に働きかけたい。 |
| 武蔵野市 | 20代、30代へは声かけしにくい。プログラムが組みにくい。 |
| 武蔵野市 | WSで出た意見に対するフィードバックは課題と捉えている |
| 小金井市 | 子どもたちが意見を言ってもいいものだという機運をたかめたい。 |
| 小金井市 | 政策にどのように子ども、若者の意見を反映していくのかが課題である。 |
| 小金井市 | 若い人たちの声を吸い上げる仕組みを、どうやってつくるかというところの具体的な議論が必要 |
| 西東京市 | 中高生の参加が少なかったことなどから、今後は10代後半から20代前半までの若者が意見を表明する機会作りが必要。 |
| 西東京市 | 若者の斬新なアイデア、行動力をかりて市政の企画段階から参加してほしい。 |
| 西東京市 | 市に興味をもってもらいまちの活性化につなげたい。 |
| 西東京市 | まちづくりを一緒にやってくれる人を探したい。 |

目的

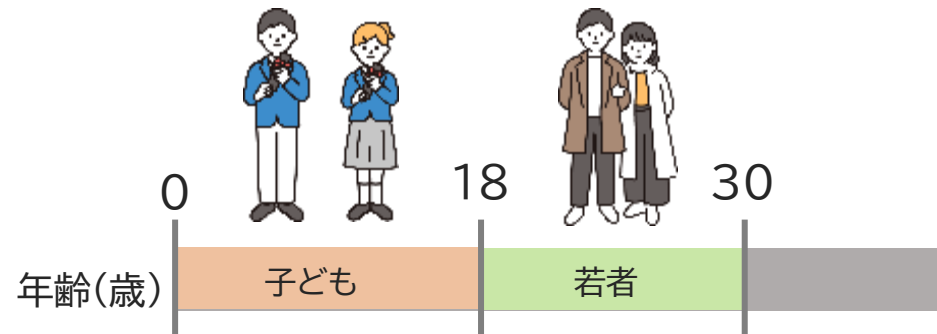
若者は次世代の担い手であり、今後主体となっていく存在である。子どもに関する施策に限らず、市の政策において、若者の意見を聴き、市政参加を促すことは行政の重要な役割であると考えている。

本研究では、子ども・若者の意見聴取及び市政への参加促進の現状や課題について、先進事例を踏まえながら分析を行い、その方策を検討する。また、研究結果については、今後の市政運営における子ども・若者の意見聴取及び市政への参加を促進し、魅力的な市政運営の実現につなげることを目的とする。

参考:本研究事業での言葉の定義

「子ども」「若者」

- 子ども：0歳以上18歳未満
- 若者：18歳以上おおむね30歳未満



「市政参加」

- 自治体に対して自分の考えや意見を伝えること
- 意見を伝えることができる場に参加すること



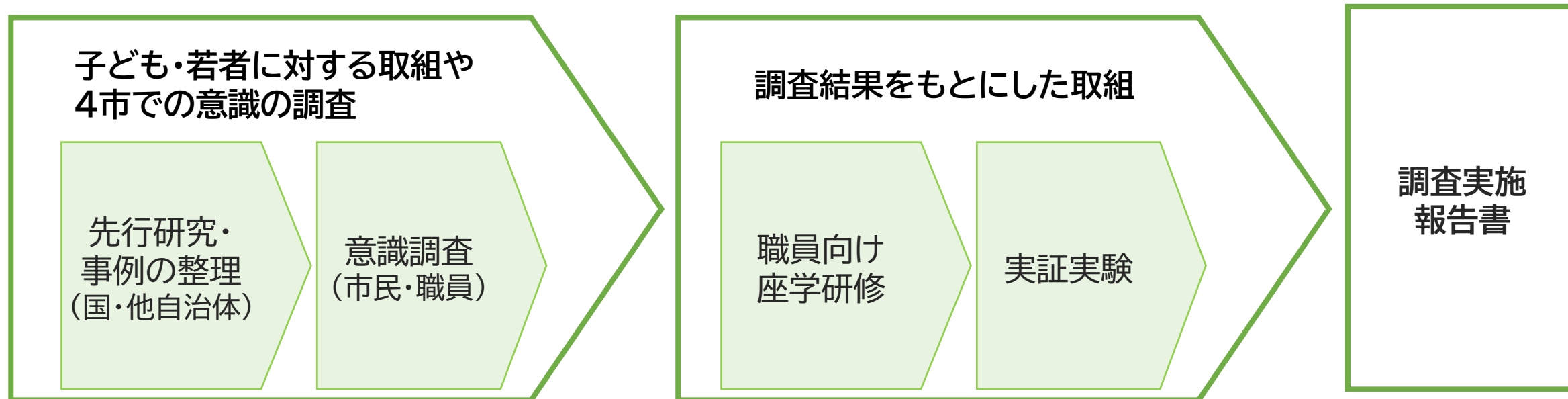
事業ステップの全体像

本研究事業は図の流れで実施した。

まず、国や他自治体の動向を把握するため、国による先行研究や他自治体の事例を調査・分析し、子ども・若者の意見を市政へ反映するポイントについて整理した。次に、子ども・若者の市政参加に対する意欲、障壁を把握するため、また4市の職員からも子ども・若者の意見反映についての認識や課題を把握するためにアンケートによる意識調査を実施した。その後、意識調査の結果をもとに、職員向けの座学研修を実施した。最後に、当事者である子ども・若者を対象として、意識調査の結果をもとにワークショップ形式の実証実験を行った。

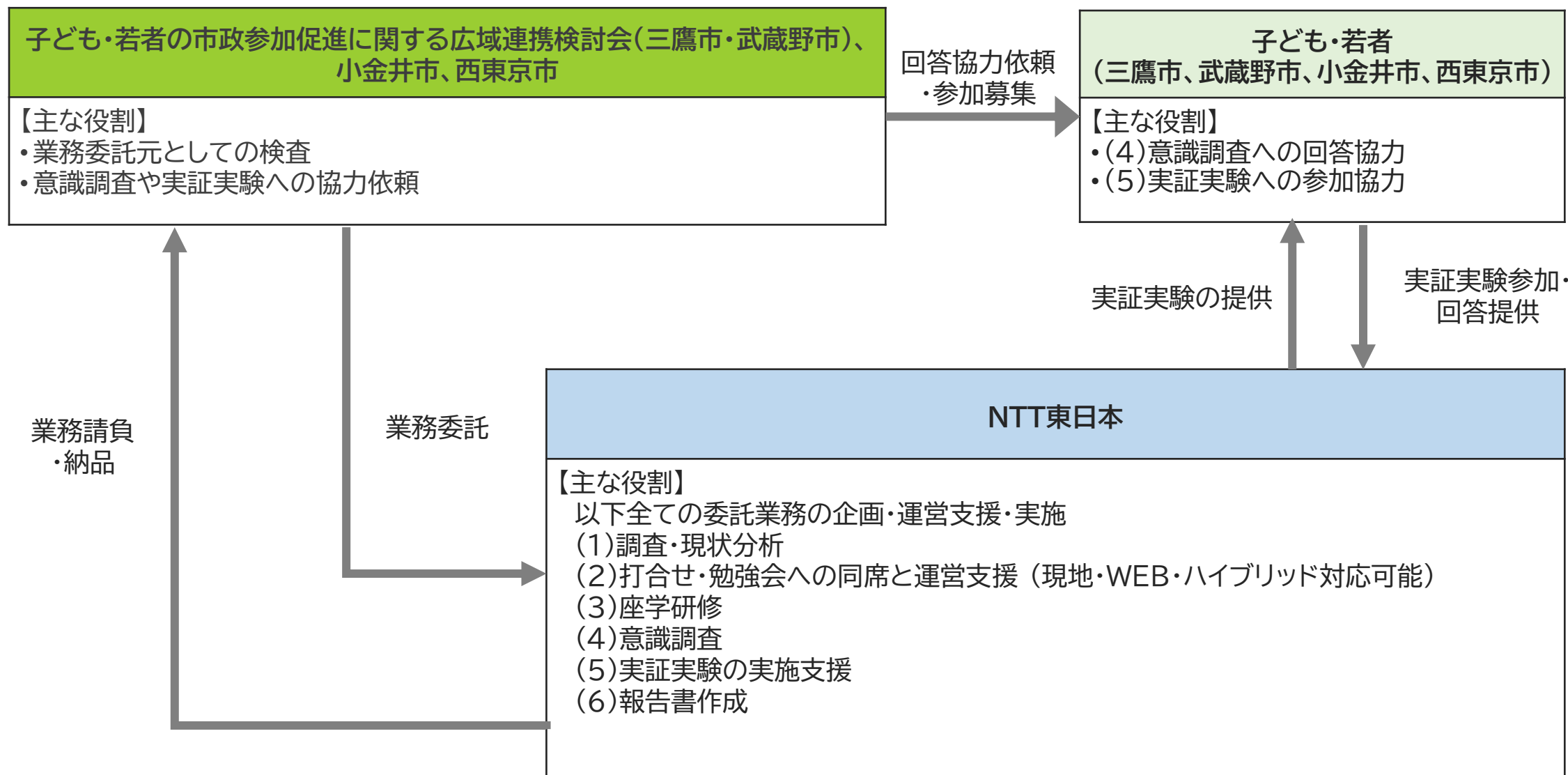
以上の実施内容をもとに本報告書を作成した。

図表:本研究事業の流れ



第1章 研究事業の概要

研究事業の体制



※本事業では多摩・島しょ広域連携活動助成金を活用



第2章 先行事例・研究の整理



第2章 先行事例・研究の整理

実施概要

■調査目的

国による子ども・若者の意見反映に関する先行研究や、他自治体の子ども・若者向けの取組の動向を整理することで、本研究事業を進める上での前提状況を把握する。

■調査期間

令和 7年 7月 1日 ~ 令和 7年 7月 10日

■調査方法

以下の先行調査を参考として、子ども・若者の市政参加の促進に関して重要と思われる点を整理した。

①こども家庭庁(国)による先行研究

- ・こども政策決定過程におけるこどもの意見反映プロセスの在り方に関する調査研究報告書(令和5年3月)

【URL】 https://www.cfa.go.jp/councils/ikenhanei_process/report

- ・多様なこども・若者の意見を聴く在り方及びこどもの意見反映に関する行政職員の理解・実践に向けたガイドライン作成のための調査研究報告書(令和6年3月)

【URL】 <https://www.cfa.go.jp/policies/iken/guideline/hokokusho>

②他自治体の取組事例

- ・地方議会が進める 主権者教育事例集 (令和7年10月)

【URL】 <https://www.nactva.gr.jp/html/casestudy/kyouikujirei r6.pdf>

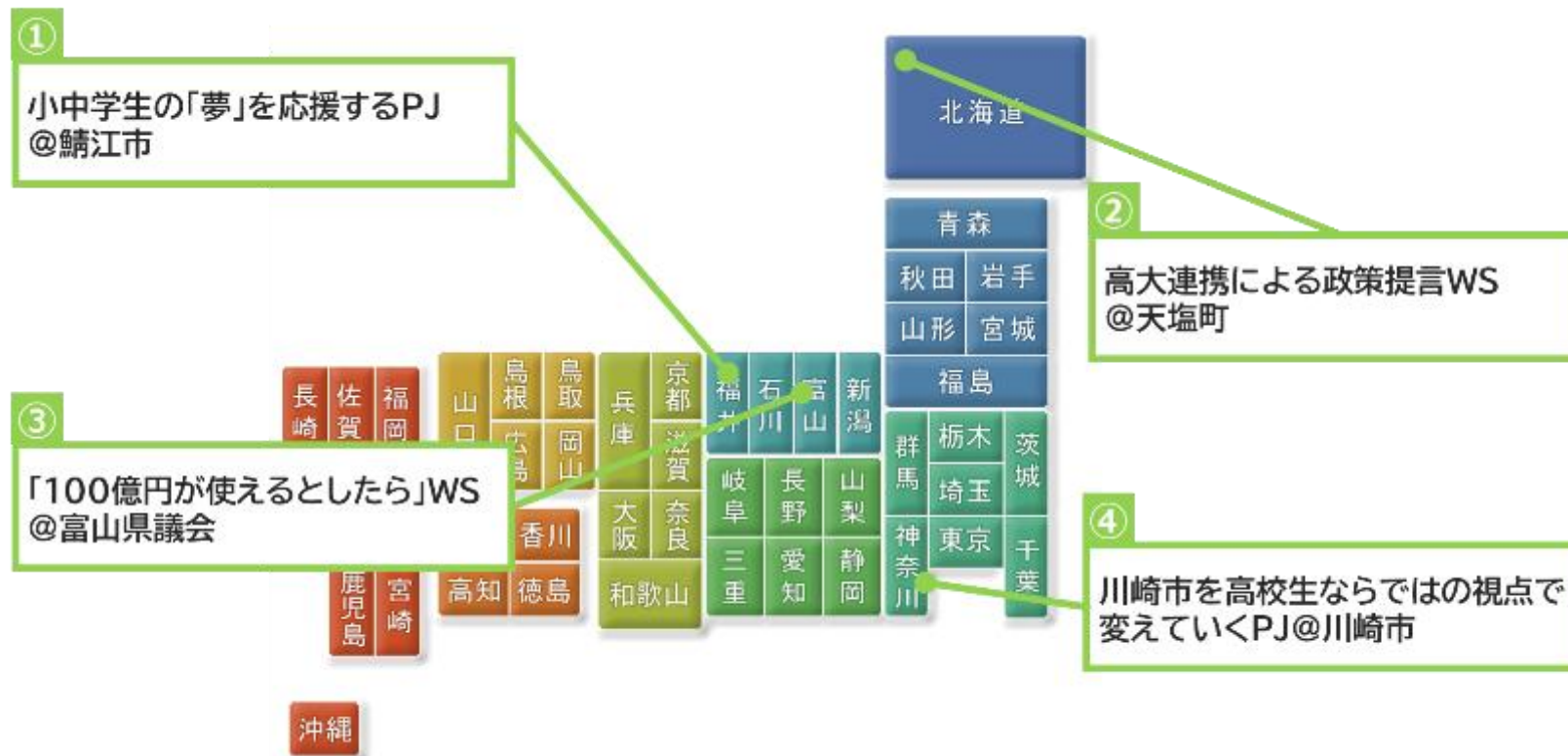
国の先行研究における総論

| 先行研究に関して市政参加促進に関わるポイント | 考察 |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> アンケート結果では、意見表明をしたいと思わない理由として「国や自治体に意見を伝えても反映されないと思うから」が43%と選択肢の中で最多。 有識者ヒアリングによると、「意見を聴かれたり、反映されたりするという経験は子ども・若者の自己効力感・自己肯定感を育み、社会の構成員としての自覚を持つことにも繋がる。」とのコメントあり。 | <p>意見を発信する当事者となる子ども・若者の目線では意見表明に対する政策反映などの実感が乏しいと思われる。</p> <p>社会の一員として、子ども・若者からの意見表明(=市政参加)を促進するうえでは、意見が行政に反映された実感を与えることが必要と思われる。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> 有識者ヒアリングによると、「意見聴取の場では子ども・若者を権利の主体・政策決定の対等なパートナーとして考えるべき」という見解が一致していた。ただし、「意見表明を求められた際に誰もがその場で意見を表明できるわけではない。」という指摘もある。 | <p>子どもの意見の主体として尊重した意見聴取の機会を提供するだけでなく、意見形成・発信を練習する機会の提供も併せて必要と思われる。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> 意見聴取の際にはその目的や、当事者にとっての意味を伝えることが重要とされる。 意見を言えるようになるための情報提供や能力育成の必要性についても言及されている。 意見聴取の際は子どもの気持ちの代弁や、言葉を補足する支援者と十分な連携が必要である。 | <p>意見聴取の機会を提供する際、参加者に対しては「なぜ意見が必要なのか」という背景の説明が必要と思われる。</p> <p>また、その場で子ども・若者の意見形成を支援する支援者(例:テーブルファシリテーターなど)の充実も必要と思われる。</p> |

他自治体の先行取組事例の調査

◆事例調査の進め方

- 全国の子ども・若者による市政参加に関する取組事例として、国の先行研究でのポイントを活用していると思われる4事例をピックアップ。(※各取組事例の詳細はP50～53を参照)
- 各取組事例での効果的と思われるポイントと、そのポイントが4市の取組へ反映可能かの観点で整理した。



第2章 先行事例・研究の整理

先行事例分析の総論

| 自治体名 | 先行事例の内容 | 4市での施策に反映が可能と思われるポイント |
|---------|---|--|
| 福井県鯖江市 | <p>取組名:「ドリームチャレンジ2024」</p> <ul style="list-style-type: none"> 市内小中学生が自分の“夢”をプレゼンし、選ばれた夢には実現に向けた学びや体験を提供する未来志向の取組。 行政・企業・地域が連携し、子どもたちの挑戦をサポートすることで、地域全体の活性化と人材育成を目指す。 | <ul style="list-style-type: none"> 伝える力を伸ばすサポート体制 プレゼン講師による研修会を実施し、子どもたちに意見発信を練習する機会を提供。 【反映例】当事者となる子ども・若者が自分の意見を考える・発信する機会の提供や、その力を伸ばすワークショップの開催。 |
| 北海道天塩町 | <p>取組名:「高大連携による政策提言ワークショップ」</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成29年度から筑波大学、令和6年度から麗澤大学を加えての官学連携(高大連携)事業を実施。 中高生の自由な発想を活かし、地域活性化や政策提言につながるアイデアプランを策定するワークショップ。 | <ul style="list-style-type: none"> 連続性を持たせたテーマ設定 1年次の町の自然環境に関するフィールドワークを踏まえ、学びから興味のあるテーマをワークショップ時に設定。 【反映例】学校で学んでいる内容に関連するワークショップ内容の設定。周知時に関連性をわかりやすく発信。 |
| 富山県 | <p>「県議会議員による高校生への出前授業」</p> <ul style="list-style-type: none"> 県内高校生が議会や民主主義について幅広く学び、社会参画意識を高めるための出前授業を令和4年度から毎年開催。 議員との対話や体験を通じて、若者の意見が政策に活かされる実感を育む。 | <ul style="list-style-type: none"> 実施結果等の広報 県公式YouTubeや広報誌で内容を公開し、授業の様子や高校生のアイデアが政策に活かされている実感を育成。 【反映例】ワークショップでの意見やアンケートの回答に対して、職員からのフィードバックコメントや政策との関連を各種メディア(市報、SNSなど)で発信。 |
| 神奈川県川崎市 | <p>取組名:「川崎ワカモノ未来PROJECT」</p> <ul style="list-style-type: none"> 高校生世代を対象に地域や社会の未来づくりに挑戦し、仲間と協働しながら自分の役割や可能性を発見するプロジェクト。 多世代の支援体制のもと、地域とのつながりや発信力を育む。 | <ul style="list-style-type: none"> やりたいことがなくてもOKな参加設計 参加のハードルが非常に低く、段階的にアイデアを育てる仕組みにより、意見聴取の機会を広く提供している。 【反映例】ワークショップやイベントの参加を募る場合、意見形成の時間を設けるなど、応募時点で明確な意見がない状態でも参加して問題がないよう配慮。 |



第3章 勉強会



第3章 勉強会 実施概要

【実施目的】

本事業を進める上で、調査・研究の方向性の確認、情報共有や意見交換のため、4市職員向け勉強会を全3回にわたり実施した。

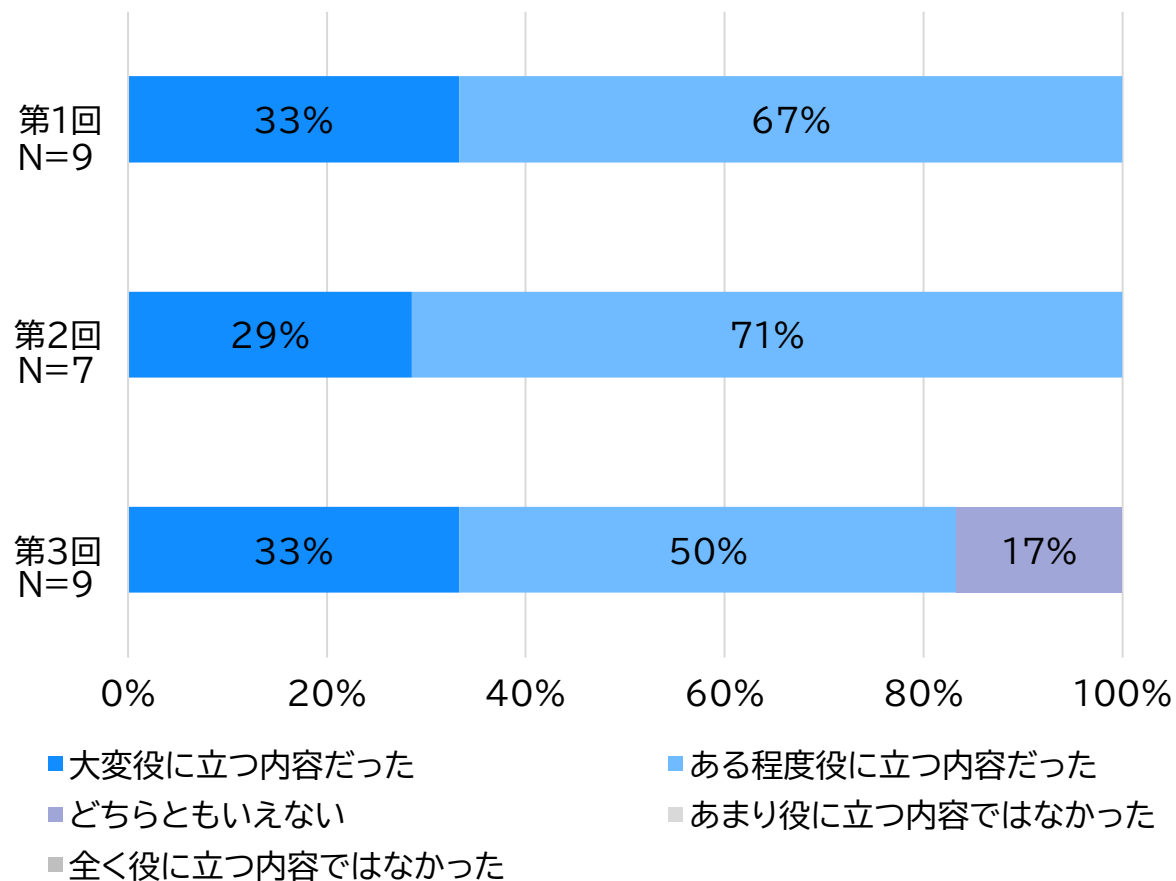
【日時・場所・内容】

| | 日時 | 実施方法 | 内容 |
|-----|--------------------------|-------|---|
| 第1回 | 2025年7月10日(木)15:00-17:00 | 対面 | <ul style="list-style-type: none">• 先行研究・事例の調査結果の共有• 市民/職員向け意識調査に向けた意見交換 |
| 第2回 | 2025年10月3日(金)15:00-17:00 | オンライン | <ul style="list-style-type: none">• 市民/職員向け意識調査データの分析結果の共有• 実証実験に向けた意見交換 |
| 第3回 | 2026年1月14日(水)10:00-12:00 | オンライン | <ul style="list-style-type: none">• 実証実験で得たアイデア内容やデータ分析結果の共有• 本研究事業全体を通じた振返り |

第3章 勉強会 結果

- アンケート結果では全3回を通して「大変役に立つ内容だった」「ある程度役に立つ内容だったという回答が8～9割となった。
- 第1回では意識調査、第2回では実証実験について、以前実施した施策からの反省点・課題や今回の施策での改善点についての意見交換が行われ、実施に向けた改善の参考とした。

勉強会に対する満足度(単位:%)



参考:参加者職員による発言、参加後アンケートでのコメント(一部抜粋)

| 開催回 | コメント |
|-----|---|
| 第1回 | 回答者がより回答しやすいよう、アンケートの設問数は必要なものに絞るなど、なるべく少なくした方がよい。 |
| | 周知時期を考えると、十分な回答数を得るために意識調査の回答期間を1か月ほどに延ばす必要があるのでは。 |
| 第2回 | ウェルビーイングカードは興味深く、自分の考えを整理しながら参加者同士の交流も楽しめると思いました。反面、対象の年代によっては、興味を持っていただくための周知方法やカードの内容、ワークの進め方等を工夫する必要があると感じました。 |
| | カードゲームを初見ですぐ理解できるか、説明の仕方に工夫が必要と感じた。 |
| 第3回 | ワークショップ参加者が以前のワークショップと比較して少なかったことの原因について考察が必要。 |



第4章 意識調査



アンケート実施概要

【実施目的】

- ・ 4市の子ども・若者の市政参加に対する意欲・敬遠理由の傾向の把握
- ・ 4市職員の子ども・若者の市政参加を推進する上での現状の認識、課題の把握

【調査期間】

令和 7年 8月 15日 ~ 令和 7年 9月 14日

【調査方法】

①市民向け:4市の小学5年生～おおむね30歳までを対象にWebアンケートを実施。

回答しやすいように、調査項目をわかりやすい表現にした各市小・中学生向けのフォームも別途設置。

小・中学校には各自治体ごとに、学校を通してアンケートの周知・回答依頼を行った。

②職員向け:4市の市職員を対象にWebアンケートを実施。

【回答数】

| | 市民 | | | | | 職員 | | | | | |
|------|-------|--------|--------|--------|------|--------|--------|--------|--------|-------|-----|
| | 12歳以下 | 13～15歳 | 16～18歳 | 19～29歳 | 総計 | 19～29歳 | 30～39歳 | 40～49歳 | 50～59歳 | 60歳以上 | 総計 |
| 三鷹市 | 1327 | 377 | 241 | 57 | 2002 | 53 | 78 | 76 | 87 | 24 | 318 |
| 武蔵野市 | 285 | 79 | 17 | 8 | 389 | 23 | 30 | 35 | 43 | 15 | 146 |
| 小金井市 | 107 | 5 | 20 | 5 | 137 | 15 | 33 | 52 | 29 | 8 | 137 |
| 西東京市 | 3 | 214 | 29 | 16 | 262 | 12 | 17 | 6 | 12 | 1 | 48 |
| 総計 | 1722 | 675 | 307 | 86 | 2790 | 103 | 158 | 169 | 171 | 48 | 649 |

※各アンケートの調査項目一覧はP54～58、周知方法の詳細はP59・60、全調査項目分析結果詳細はP61～93を参照。

調査結果分析(市民①)

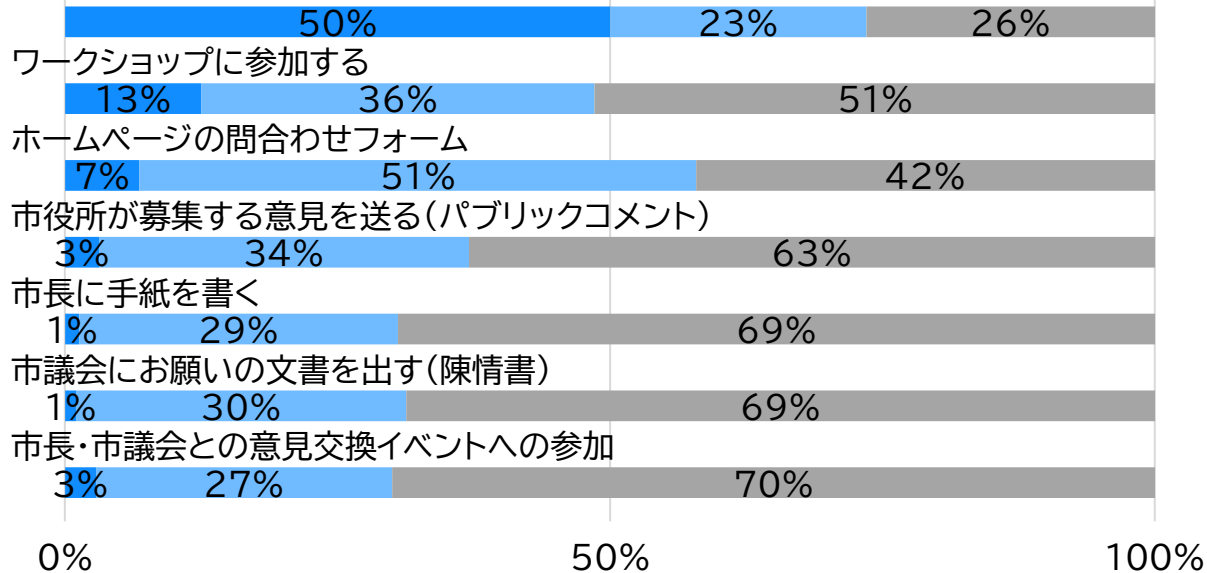
- Q4では手段の認知度について「使ったことがある」の割合が高い順でアンケートの回答、ワークショップの参加、ホームページへの問合せフォームが挙げられた。ただし、「知っているが使ったことがない」の割合もそれぞれ23%、36%、51%と認知度と実際の利用経験に隔たりがあることがわかった。
- Q6では市政参加意欲について前向きな回答が63%と、意欲の高い層がいることが分かる。年齢別に見ると、特に19-29歳の参加に対する意思が強い(82%)。

Q4.意見伝達手段認知度(単位:%)

N=2790

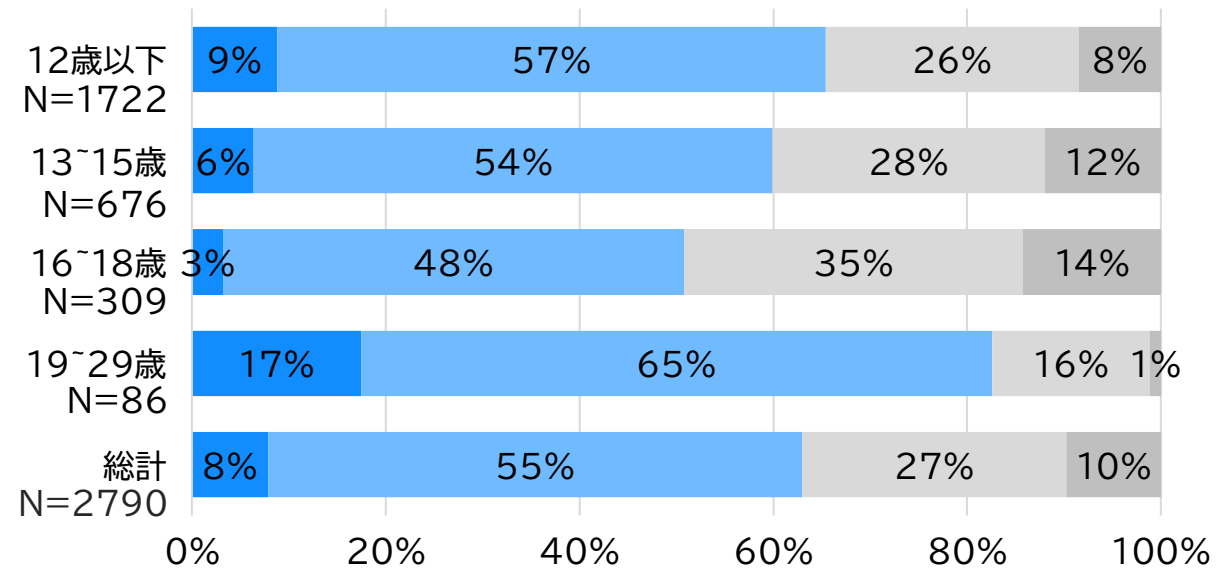
■使ったことがある ■知っているが使ったことはない ■この方法があることを知らない

アンケートに答える



Q6.市政参加意欲(単位:%)

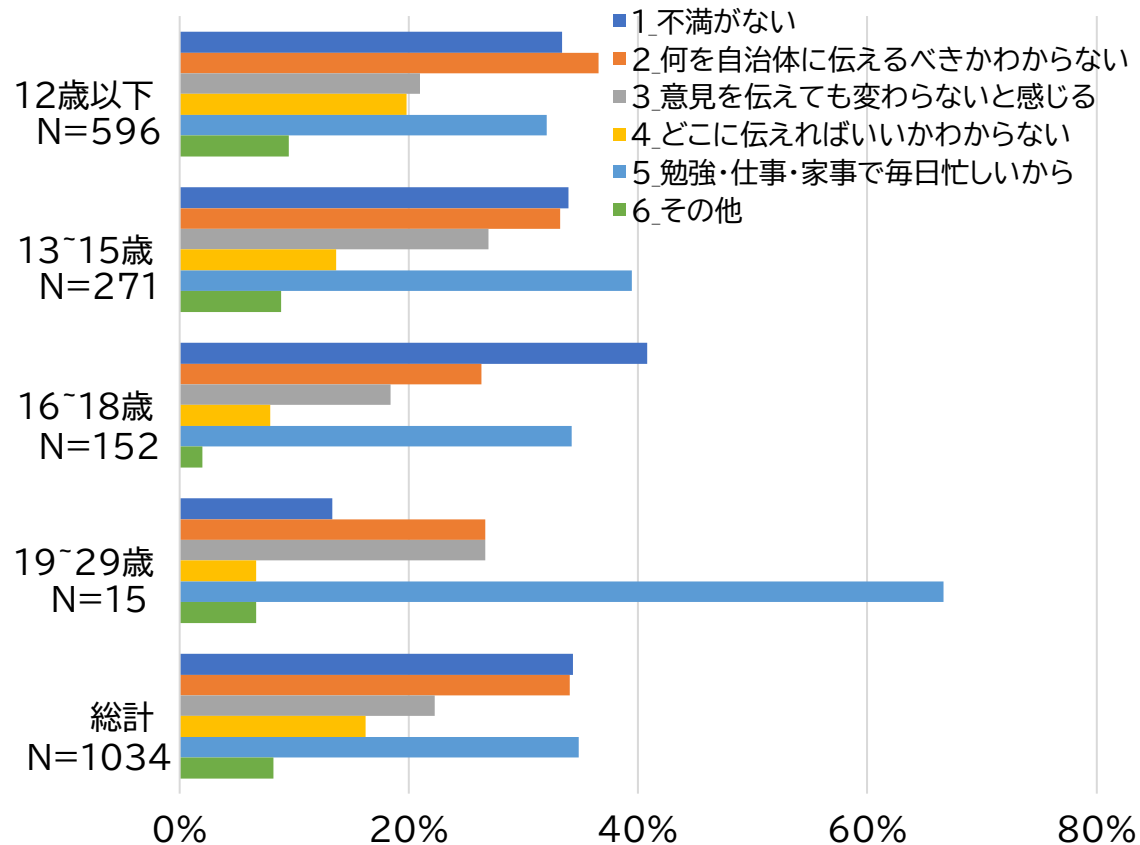
■積極的に参加したい ■興味のあるものは参加したい
■あまり参加したくない ■参加したくない



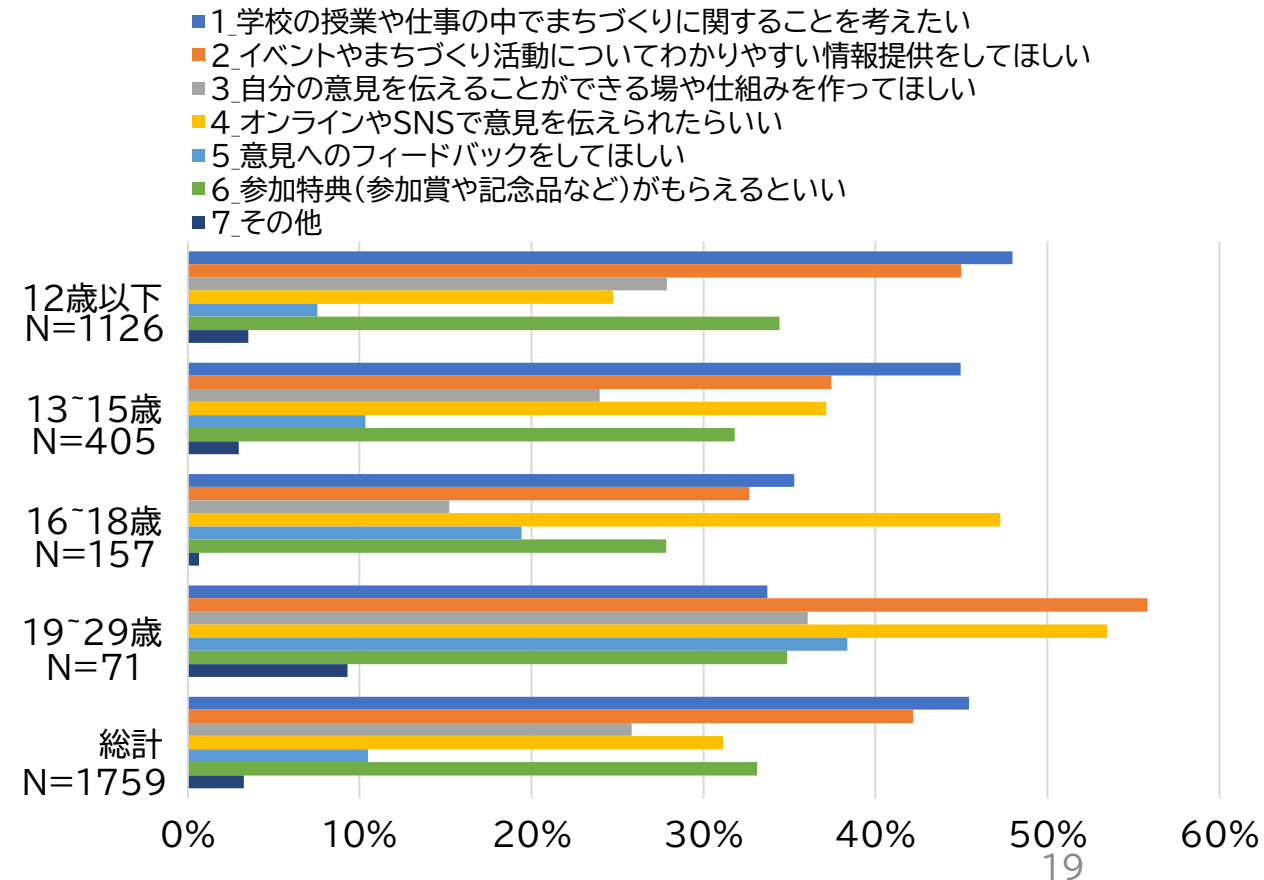
調査結果分析(市民②)

- Q7では参加敬遠理由について「忙しい」などの時間的制約以外の理由では「不満がない」「何を伝えるべきかわからない」が比較的高い。
- Q11では市政参加を促進する手法について、19-29歳の6割近くがイベントやまちづくり活動についてのわかりやすい情報提供を求めている。

Q7 参加敬遠理由(単位:%)



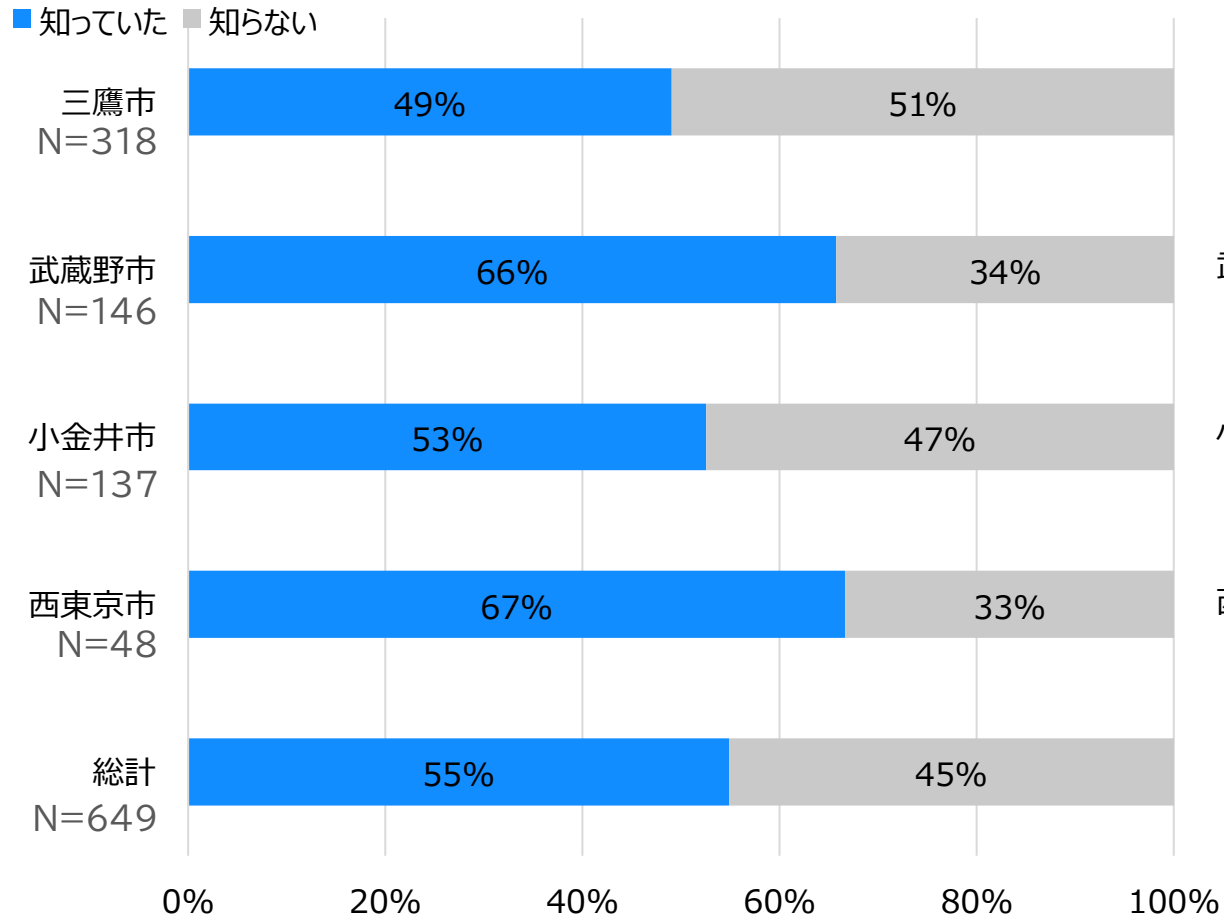
Q11.市政参加促進手法(単位:%)



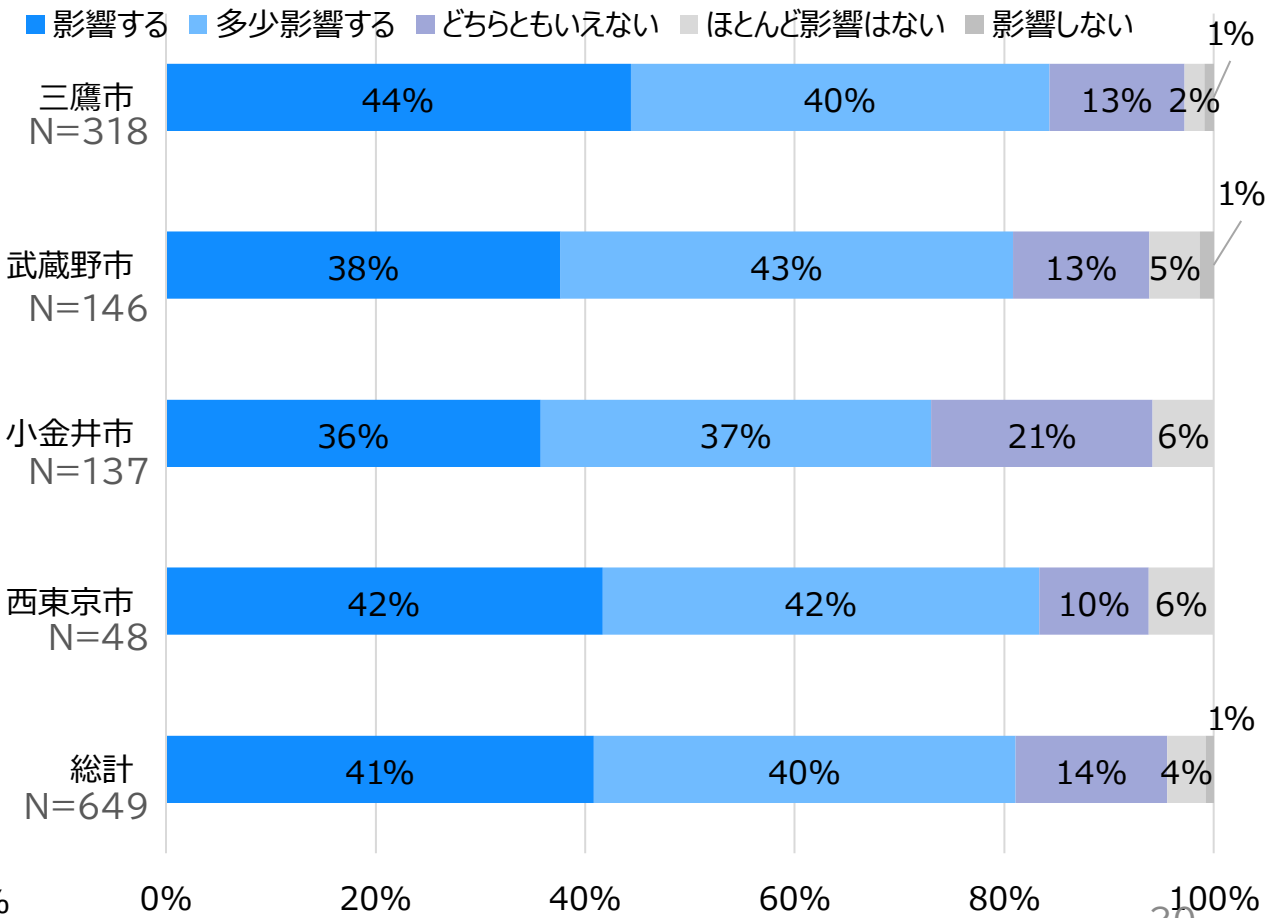
第4章 意識調査 調査結果分析(職員)

- Q5では4市職員全体でウェルビーイングの認知度について、「知っていた」が55%。
- Q9では子ども・若者の市政参加による地域社会への影響について「影響する」「多少影響する」も合わせて81%と、重視されている。

Q5.ウェルビーイング認知度(単位:%)



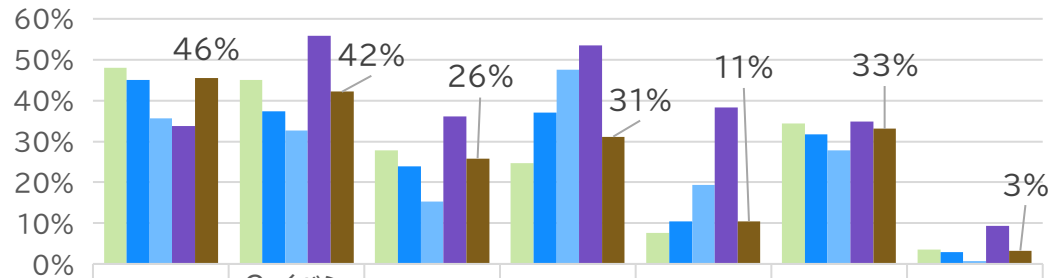
Q9.子ども・若者の市政参加影響(単位:%)



調査結果分析(市民、職員比較)

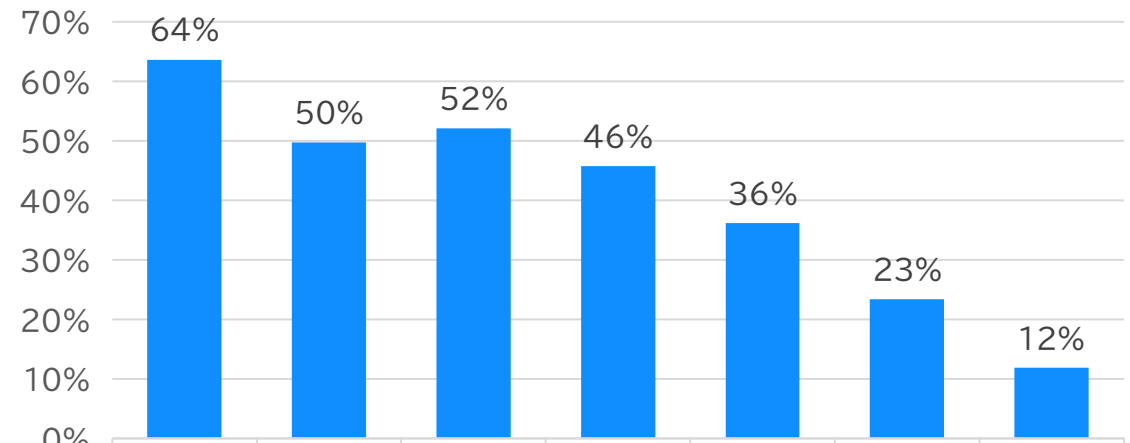
- 市政参加促進手法に「学校の授業を活用」を挙げたのは市民全体で46%、職員全体で64%と、必要性が高いとの認識が共通している。また、市民のうち19-29歳の年代では「イベントやまちづくり活動」と「オンラインで伝える仕組み」を挙げたのはそれぞれ56%、53%となり、職員結果(50%、52%)と共通している。
- 一方で、市民のどの年代でも回答者の3割ほどが「参加証や記念品」を促進手法として挙げているが、職員回答では回答者全体で23%と、必要性は低いと捉えられていることが分かる。

市民アンケート結果(単位:%)



| | 1_学校の授業や仕事の中でまちづくりに関することを考えたい | 2_イベントやまちづくり活動についてわかりやすい情報提供をしてほしい | 3_自分の意見を伝えることができる場や仕組みを作ってほしい | 4_オンラインやSNSで意見を伝えられたらいい | 5_意見へのフィードバックをしてほしい | 6_参加特典(参加賞や記念品など)がもらえるといい | 7_その他 |
|--------|-------------------------------|------------------------------------|-------------------------------|-------------------------|---------------------|---------------------------|-------|
| N=1722 | 48% | 45% | 28% | 25% | 8% | 34% | 4% |
| N=675 | 45% | 37% | 24% | 37% | 10% | 32% | 3% |
| N=307 | 36% | 33% | 15% | 48% | 19% | 28% | 1% |
| N=86 | 34% | 56% | 36% | 53% | 38% | 35% | 9% |
| N=2790 | 46% | 42% | 26% | 31% | 11% | 33% | 3% |

職員アンケート結果(単位:%)



| | 1_学校の授業を活用し、子ども・若者の市政への関心を高める | 2_子ども・若者にとってわかりやすい情報提供や情報発信ツールの多様化を行う | 3_子ども・若者が意見を伝えることができる場や仕組みを用意する | 4_子ども・若者がオンラインやSNSで意見を伝えることができる仕組みを用意する | 5_子ども・若者の意見へ市からフィードバックを行う | 6_子ども・若者向けに参加賞や記念品などの参加特典を用意する | 7_その他 |
|-------|-------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------|---|---------------------------|--------------------------------|-------|
| N=649 | 64% | 50% | 52% | 46% | 36% | 23% | 12% |
| ■ 総計 | 64% | 50% | 52% | 46% | 36% | 23% | 12% |

意識調査結果の総論

| 意識調査結果により見えた特徴 | 考察(市政参加に有効と思われる点 等) |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> • 市政参加しやすくなる手法として、「参加特典の充実」を回答市民全体の3割が選択している。 | <p>市政参加促進の手法としての特典の効果については、実際に効果があるか実証実験の場で検証し、その結果と比較が必要である。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> • 意見伝達手段については認知度の高い順にアンケート、ワークショップ参加、ホームページの問合せフォームが挙げられた。ただし認知度と実際の利用経験には隔たりがある。 | <p>意見表明の機会を提供する際には、すでに認知度がある手段をより参加しやすいもの、意味がわかるものにするのが重要である。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> • 市政参加意欲については前向きな回答が6割と、意欲の高い層がいることが分かる。ただし、参加意欲が低い人からは、そもそも回答が得られていない可能性があるため、注意が必要である。 | <p>市政参加の意思がある子ども・若者がいることが確認できたため、参加意欲を市政参加の具体的な行動へつなぐ導線が必要と思われる。そのため、「参加できそう」ととらえてもらえる身近さがあり、参加のハードルが低い機会の提供が必要。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> • 参加敬遠理由では、「忙しい」などの時間的制約以外の理由では「不満がない」「何を伝えるべきかわからない」が比較的高い。 | <p>意見表明に対して「困りごとや不満を言うもの」というイメージがあると思われる。「アイデアや感想でもよい」という気軽な意見表明の場の提供や、改めて市政に対する意見形成の機会を設けることが必要。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> • 市政参加を促進する手法では、19-29歳の6割近くがイベントやまちづくり活動についてのわかりやすい情報提供を求めている。 • 19-29歳ではまちづくり活動を敬遠する理由として「毎日忙しいから」という回答7割弱と、全体の3割と比べ大きく上回っている。 | <p>現状の情報発信に課題があり、情報不足や情報のわかりにくさが市政参加の障壁になっていると考えられる。 また、忙しさによる市政参加の障壁を除くため、19-29歳の意見聴取をする場合はオンラインでの開催、時間的制約の少ないSNSやチャットツールの活用が重視されると思われる。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> • 小学生・中学生の回答数に比べ、16-29歳の年代からの回答数が6分の1ほどと課題があり、情報を入手しやすい手段も年代ごとに違う。 | <p>特に16-18歳・19-29歳については、各年代の傾向に合致した手段での周知の強化が必要と考えられる。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> • 4市職員全体でウェルビーイングについての認知度について、「知っていた」が55%。 | <p>約45%の職員がウェルビーイングについて知らないことがわかったため、子ども・若者の意見反映の促進の重要度を認識させるため、ウェルビーイング認知度向上に向けた取組が必要である。</p> |



第5章 座学研修



第5章 座学研修 実施概要

【座学研修テーマ】

“わたしたち”のウェルビーイングの視点から/子ども・若者が市政・地域へ自分事として、愛着を持って関わるために

【実施目的】

ウェルビーイングの学びから子ども・若者の市政参加につながる知見を学ぶため。

【開催日時】 2025年11月6日(木) 15:00-16:00

【開催場所】 三鷹産業プラザ 701・702

【研修講師】 NTT株式会社 社会情報研究所 上席特別研究員 渡邊淳司

講師情報: 人間の触覚のメカニズム、コミュニケーションに関する研究やウェルビーイングな社会を実現する方法論について探究しており、ウェルビーイングに関する深い知見と豊富な経験を有しているため選定した。

【研修内容】

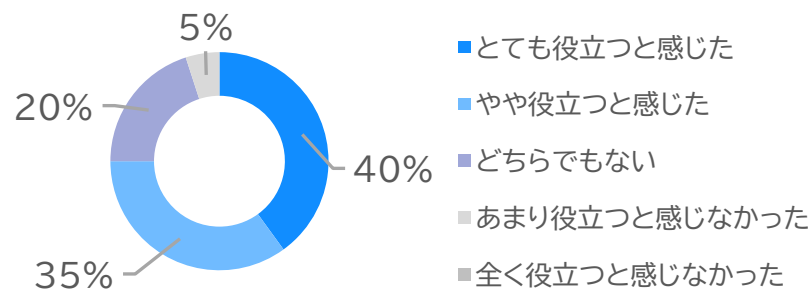
| 項番 | 章テーマ | 詳細 |
|----|-----------------------|--|
| 1 | ウェルビーイングに関する前提知識 | ウェルビーイングとはなにか ウェルビーイングカードの紹介 |
| 2 | ウェルビーイングの学びから市政参画を考える | ウェルビーイングの学びによる社会・市政と関わる資質/能力の育成 地域社会や地球社会との関わりの実例 |
| 3 | 質疑応答 | — |

座学研修後アンケート結果

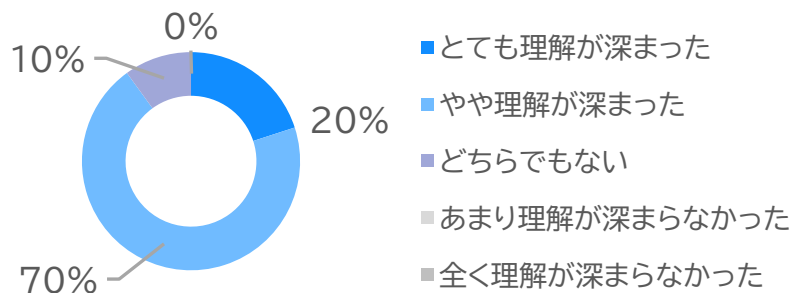
- 全体的に座学研修やウェルビーイングに関するポジティブな回答が多く見られた。
- 一方で、ネガティブな回答としては、「ウェルビーイングの概念理解は進んだものの、市民参加業務への具体的な活用イメージが沸かなかった」という意見もあった。

【アンケート結果】 N=20(単位:%)

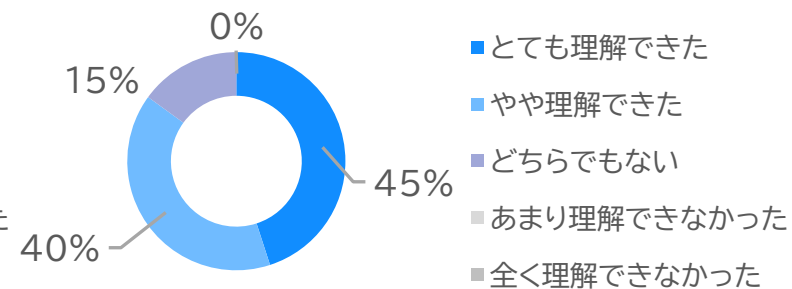
業務への有用性



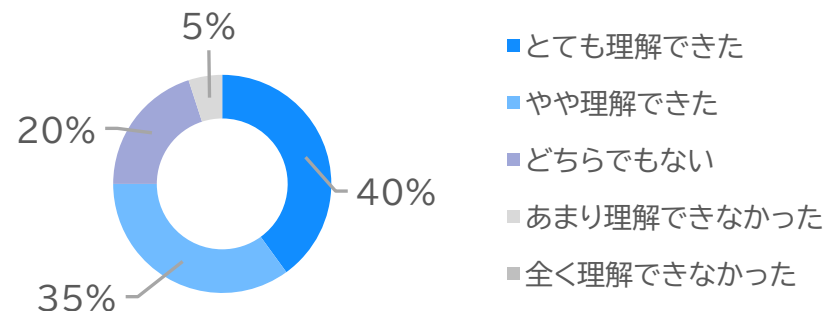
ウェルビーイングについての理解



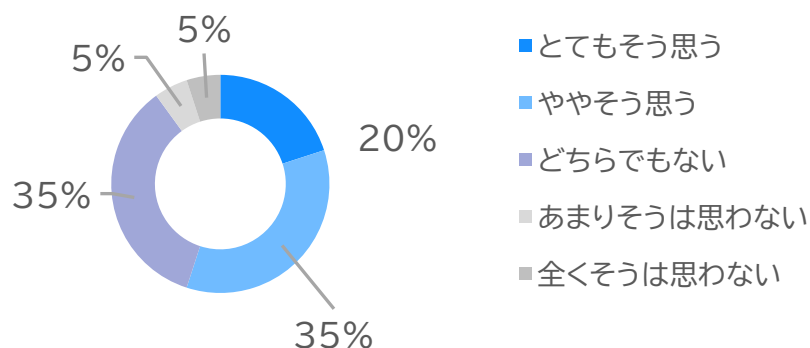
市政参加における“わたしたち”の観点の重要性



ウェルビーイング教育の重要性



ウェルビーイング活用施策の意向





第6章 実証実験



目的

意識調査の結果から、子ども・若者が市政参加を敬遠する理由として、時間的な制約を除くと「市政に対する課題感を持ちにくい」、また、「何を自治体に伝えるべきかわからない」ということが把握できた。

この課題の解決策として、行政が自分の生活にどうかかわるのかイメージを持つことや、子ども・若者が市政参加の当事者意識を持てるようにすることが市政参加促進に効果的ではないかと仮説を立てた。

そのため、生活環境の理想(ウェルビーイング)を用いた市役所の取組の理解促進、意見を持つための当事者意識の醸成、気軽な市政参加の一助となることを目的として、ワークショップ形式の実証実験を実施することとした。

■本ワークショップでの工夫点

- 市民向け意識調査の「市政参加手段の認知度」で出た傾向から、認知度が比較的高く、ファシリテーターのフォローの上で具体的な意見を形成できる場としてワークショップ形式を採用。
- ワークショップ内では子どもまんなか社会でのキーワードとなる「ウェルビーイング」を取り扱うが、子ども・若者にとっても理解しやすい形とするため、ウェルビーイングカード(P94参照)を活用したワークを導入。
- 市民に主体的な意見を持ってもらうため、市政参加の手法アイデア検討だけではなく、市に対する自分の意見について考えるワークを設定。
- 意識調査から参加特典を求める声が3割ほどあったことから、試行的に特典(QUOカード、参加記念証)を用意。

ワークショップ概要

【開催日時】 12月21(日)10:00-12:00

【開催場所】 三鷹産業プラザ 701・702

【募集方法】 4市に居住する13歳(中学1年生)～29歳を対象に、4市の市報掲載、SNS等を通じて募集した。

【参加者】 10名(中学生:6名、18歳以上:4名) ※当日欠席5名

【参加特典】 QUOカード(500円分)/参加証明書

【ワークショップタイトル】 「わたしの“理想の暮らし”から考えるまちづくりワークショップ」

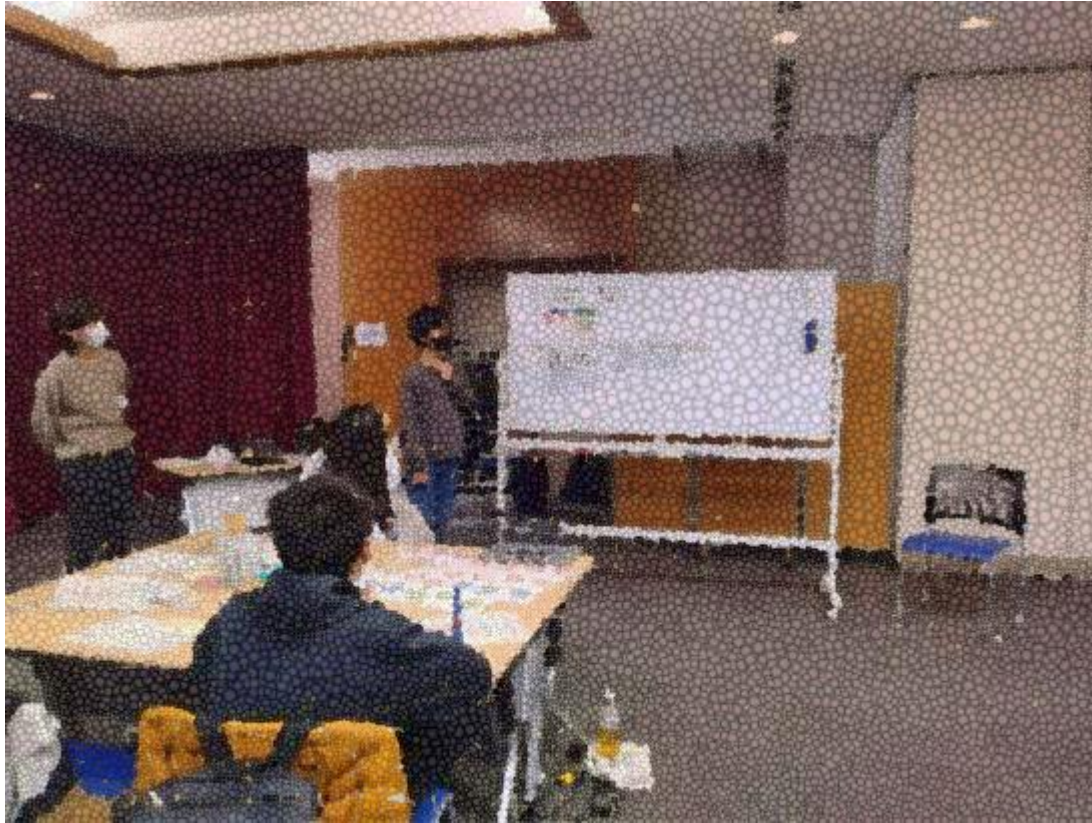
【ワークショップ内容】

| | 項目 | 内容 | 予定時刻 | 所要時間 |
|---|-------------|--|----------------------------|------|
| 1 | 説明① | ウェルビーイングとは何か | 10:00～10:10 | 10分 |
| 2 | ワーク① | テーマ①自分にとってのウェルビーイングをカードから選んでみよう テーマ②選んだウェルビーイングに関わるエピソードを考えてみよう | 10:10～10:30 | 20分 |
| 3 | 説明② | ウェルビーイングの周囲とのかかわり | 10:30～10:35 | 5分 |
| 4 | | 市政の役割について | 10:35～10:45 | 10分 |
| 5 | ワーク② | テーマ①ウェルビーイングと市政テーマをもとに、自身のやりたいことを考えよう テーマ②その意見を市に伝えるとき、どんな手段をとれるか考えよう | 10:45～11:00 11:05～11:15 | 25分 |
| 6 | グループ ワーク | グループ内で個人ワークを発表 | 11:15～11:35 | 20分 |
| 7 | | 各グループ代表のアイデアを発表 | 11:35～11:55 | 20分 |
| 8 | アンケート | アンケート回答 | 11:55～12:00 | 5分 |

当日の様子(グループワーク)



当日の様子(発表中)



参加者からの意見・アイデア(中学生)

 : 当日発表されたアイデア

| No | 選択したウェルビーイングカード | 市政に関わるテーマ | 意見 | 市へ意見を伝える手法アイデア |
|----|-------------------|-------------|--|---|
| 1 | 熱中、日常 | 子育て | <ul style="list-style-type: none"> ・出産費に対する補助金を出してほしい。 ・保育士の負担軽減や待遇改善をしてほしい。 ・仕事の継続/育休の期間増加の推奨をしてほしい。 ・保育園の増加/市営訪問保育の設立をしてほしい。 | <ul style="list-style-type: none"> ・問合せ用のOpen Chat作成 ・市役所をもっとフリーな場所にし、意見箱や意見を言える職員(私服姿など)を配置。 |
| 2 | 挑戦、成長 | 学校生活 | <ul style="list-style-type: none"> ・挑戦することで自分の成長を実感するため、学校行事の実行委員に挑戦したい。 ・その際にはボランティア活動など、生徒以外にも地域の人と協力して活動したい。 | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒向けに学校の公式サイトなどで生徒に周知。 ・地域の人向けに三鷹市の公式HPでボランティア参加を募集する |
| 3 | 日常 | 文化・芸術(生涯学習) | <ul style="list-style-type: none"> ・三鷹市の博物館をもっとパワーアップしたい。(解説の増加、周知の強化など) | <ul style="list-style-type: none"> ・直接市の人に話に行く ・博物館でのイベントやボランティアでの関わり |
| 4 | 自然とのつながり | 自然環境 | <ul style="list-style-type: none"> ・通学路をきれいにするため、毎日朝10分くらい自分の家の近くを掃除するボランティア活動を開催したい。 | <ul style="list-style-type: none"> ・SNSでの発信(Xのハッシュタグを利用など) |
| 5 | 自己決定、自己への気づき、社会貢献 | 将来の仕事 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分のしたいことの実現のため、進路や職業を選択できるように仕事体験や仕事紹介のイベントを開催してほしい。 | <ul style="list-style-type: none"> ・市の政策についてのアンケート ・SNSで意見を発信 ・Chatのアプリ |
| 6 | 挑戦、マインドフルネス、共創 | スポーツや健康 | <ul style="list-style-type: none"> ・たまに入れないことがあるので、体育館のコートの貸し借りができるようなもっと多くしてほしい。 ・スポーツ関連のイベントを定期的で開催したい。 | <ul style="list-style-type: none"> ・市の問合せフォーム |

参加者からの意見・アイデア(18歳以上)

 : 当日発表されたアイデア

| No | 選択したウェルビーイングカード | 市政に関わるテーマ | 意見 | 市へ意見を伝える手法アイデア |
|----|--------------------------|-----------|--|--|
| 7 | 日常、関係づくり、社会貢献 | 市の施設 | <ul style="list-style-type: none"> ・入しやすい雰囲気・継続性を兼ね備えた「同世代・幅広い世代・多様な人をつなぐ場」を作りたい。そこを訪れた人が学ぶ、考える、投票する、意見を発信するなどの機会を提供したい。 例) カフェ併設の施設/イベント/子ども食堂/ワークスペース/児童館/福祉設備 | <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップや意見交換会 (より長期的に伝えられるプロジェクト化も想定) ・無理やり意見を聞こうとしても、意見がないことが多いため、普段から考える、伝える、他者の意見を聞くなどの練習の機会づくりが必要。 |
| 8 | 多様性 | 将来の仕事 | <ul style="list-style-type: none"> ・小学生のうちから将来の仕事について経験をさせたい。 | <ul style="list-style-type: none"> ・民間と市が連帯し、体験しやすい環境を整備するためによりSNSを活用。 ・民間⇄市⇄小学校の相互連携の強化 |
| 9 | 挑戦、感謝、共創 | 自然環境 | <ul style="list-style-type: none"> ・井の頭公園の清掃に関わりたい(ゴミ拾い 等) ・公園好きだが、観賞用感が強いと感じるので三鷹でも“市民みんなでいじれる自然”がほしい 例) シモキタ園芸部 | <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ参加 ・パブリックコメント ・市の問合せフォーム ・賛同を募ったうえで、マチコエのOB・OGを巻き込む |
| 10 | 縁、熱中・没頭(ただし個人ではなく集団で)、信頼 | 学校生活 | <ul style="list-style-type: none"> ・核家族化等、地域とのつながりの希薄化が進んでいるため、子どもが安心して頼れる地域の人をたくさん作ることが大事。 ・学校(主に市立の小中)と地域をつなげることに市がもっと関わってほしい。 例) 市内の企業やイベントへの子どもの協力 地域の人を学校に呼んだ交流の場づくり | <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ (子ども×市)(大人×市)(大人×子ども×市) ・地域イベント参加によるその場でのおしゃべり(「聞かれて答える」ではない) |

アイデアに対する考察

● 各年代共通の傾向について

- ・ ウェルビーイングをもとに行政テーマに対して主体的な意見を持っている。
- ・ 市の主催するイベントやボランティア、ワークショップに対して好意的な意見が多い。
- ・ 「意見を言いやすい雰囲気」を重視する意見があり、意見を発しやすい機会の創出や話しかけやすい市役所スタッフの配置などのアイデアが出ている。

● 中学生のアイデアについて

- ・ 身近な生活圏での課題(保護者の子育てに対する大変さ、通学中の歩道での気づき、部活の経験を通してなど)に着目して意見を出している傾向がある。
- ・ 市政参加アイデアでは意見表明の負担が低い、かつ匿名性のあるオンライン形式と、市役所へのわかりやすい窓口の設置というオフライン形式の双方が出たが、比較的オンライン形式に向かう意見が多かった。

● 18歳以上のアイデアについて

- ・ 制度への関心が中学生と比較して高く、構造的・仕組み的な改善(相談しやすい場づくり、キャリア教育の早期化など)に視点が向く傾向がある。
- ・ 市政参加の手法のアイデアでは、直接対話(ワークショップや意見交換会)とオンライン(SNSやフォーム)がそれぞれ出たが、直接対話についてはより具体的なアイデアが出ており、双方向の対話を重視している傾向がある。

参加前/参加後アンケート 数値分析(1/2)

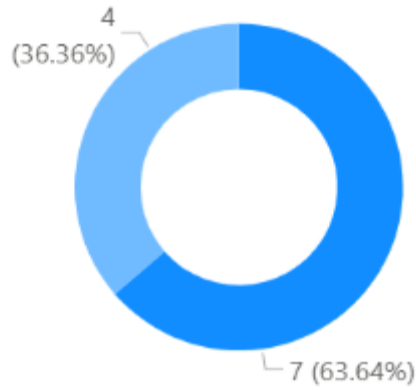
参加者に対して、ワークショップ参加前、参加後にそれぞれWebフォームによるアンケートを実施した。

- 市政参加意欲についてワークショップ前の時点で「積極的に参加したい」「興味のあるものは参加したい」と回答があり、参加者に高い意欲があることが分かる。また、市政参加意欲について「積極的に参加したい」と回答した層はウェルビーイングの認知度も高かった。
- 自身の生活へ市政が関わっている実感については「少し実感がある」を含めるとワークショップ参加前後で16ポイント上昇した。
- 事前アンケートではウェルビーイングについて「知らない」「聞いたことはあるが、よく知らない」が全体の54%と、約半数を占めていたが、ワークショップ後の参加者全員から「よく理解できた」「ある程度理解できた」との回答が見られた。(46ポイント上昇)

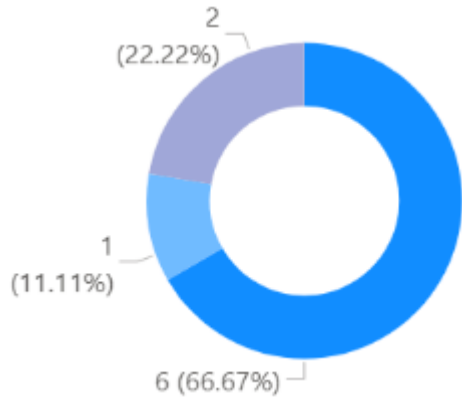
※該当のグラフは次ページ、回答全体の詳細はP97、98を参照。

参加前/参加後アンケート 数値分析(2/2)

市政参加意欲

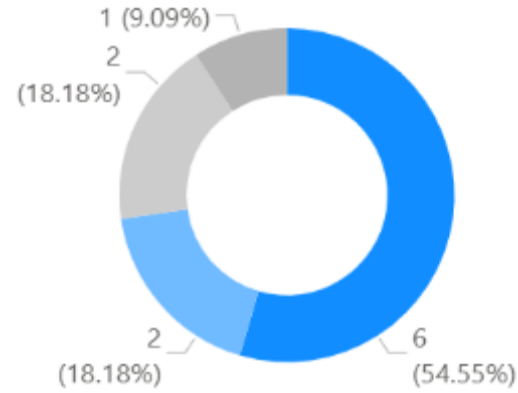


- 積極的に参加したい
- 興味あるものは参加したい

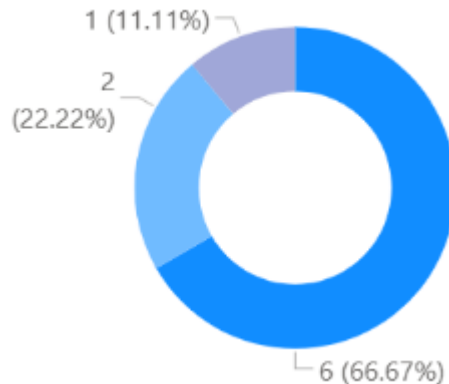


- 積極的に参加したいと思うようになった
- 興味あるものは参加したいと思うようになった
- 変化はない(元々積極的に参加したい・興味あるものは参加したいと思っていた)

生活に市役所の活動が関わる実感

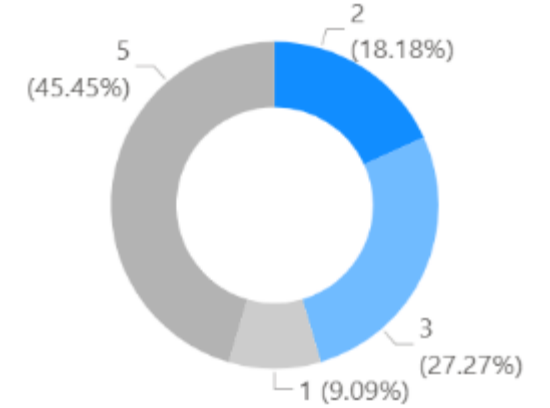


- かなり実感がある
- 少し実感がある
- あまり実感がない
- 全く実感がない

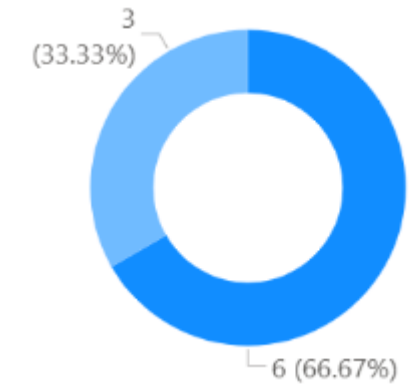


- かなり実感するようになった
- 少し実感するようになった
- あまり変わらない

Wellbeingの認知・理解



- よく知っている
- なんとなく知っている
- 聞いたことはあるが、よく知らない
- 知らない



- よく理解できた
- ある程度理解できた

参加前

N=11

参加後

N=9

参加後アンケート コメント分析

- 同年代の交流の場になるなどの側面でワークショップ形式は参加者から好評である。
- 意見を深めるためや、実際に市に意見を伝えるために市やほかの参加者との意見交流の場がほしいとの要望あり。
- 受動的なきっかけが現在の能動的な関わり(ワークショップに参加するなど)につながっているためきっかけが大切であり、また、意見が実際に形になっている実感を与えることが必要との声あり。

参考:ワークショップ参加者による参加後アンケートでのコメント

| 項番 | コメント |
|----|--|
| 1 | ウェルビーイングについて同年代の子と意見を出し合っ楽しかった。 |
| 2 | ウェルビーイングなどについてグループで沢山考えてその事について詳しく知る事が出来たのでよかったです！ 次の市のイベントも参加したいなと思いました！ |
| 3 | 実際に市に提案する、もしくは、市側が提示する条例などに対する意見交流の機会がほしい |
| 4 | 意見の中でたしかに今のご時世色々苦しい大変っていうのを若いみなさんが知っていて意見を聞いて良かったと思います。 各グループ内も素晴らしい発表良かったです。 |
| 5 | 「個人で考えてグループで発表」で終わらせずに、グループでさらに話し合っ意見を深めていくという活動が必要だと思います。そのためにも、もっとワークショップの時間を長くっ欲しいです。あるいは複数回行っとか。 |
| 6 | 市民の立場になっ意見を言うことはとても大切だと感じた。 |
| 7 | 関わりのない人と対話でき、良い機会だった。一方、4市合同で年代もより開かれているのに参加者が少ないことは残念だった。学生のたくさんテスト期間に被らないよう注意することと、学校への広報を強化することが大切かと思う。アンケートがスマートフォンを持っている前提である部分が少し気になった。デジタル機器普及への対応は大切だが、排除の可能性も考慮すると良いと思った。 |
| 8 | 私は、中学校(三鷹市立)の授業の中で、市のまちづくりについてグループ学習に取り組んだことが、高校生の時のまちづくりボランティアに繋がり、大学での専攻や将来の夢につながりました。今でこそまちづくりに関する能動的な関わりをしていますが、始まりは中学校の授業であり、受動的なきっかけです。若者の主体的な意見出しがなされていない今、小中学校で、学生に対してまちづくりについて考える機会を与えることはとても大切だと感じています。また、その声が実際に形になっている実感が得られること(広報など)が、若者の関心を高め、永続的な関わりにつながるのではないかと思います。 |

ファシリテーターによる進行振り返り

当日、ワークショップ全体の進行を担当したメインファシリテーター、各参加者グループごとにサポートを担当したテーブルファシリテーターを含め、ワークショップ進行に対する振り返りを実施した。

- 全体の時間の見直し
 - ・ 話したいモチベーションが高い参加者が多かったため、より長い開催時間の設定が必要。
 - ・ 18歳以上の参加者はより具体的なアイデアを出す傾向があるため、アイデア説明やそれに対するコメントも長くなる傾向がある。そのため中学生・高校生と18歳以上のワークの時間設定は考慮が必要。
- 参加者のグループ編成
 - ・ 年齢差が小さいグループ編成としたため、ワークはスムーズに実施できた。
 - ・ 参加者のテーマに対する理解度の違いによって発言量が偏る場面も見受けられたため、理解度ごとにグループを分けることでよりディスカッションの精度が上がると思われる。
- ワークショップの実施内容
 - ・ グループごとに発表を実施した点について、中学生参加者から「大学生の発表はレベルが違う」など、影響を受けた旨のコメントがあったため、発表は相互に聞く時間を設けることが大切。
 - ・ 今回のワークショップではアイスブレイクで単一の話題を設定したが、参加者に思い当たる話題がなかった場合アイスブレイクの効果が薄れた。アイスブレイクではいくつか話題を用意するとより効果が出ると思われる。

実証実験結果の総論

| 実証実験結果 | 考察 |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ワークショップ参加後アンケートのコメントでは「意見を出し合うこと」「グループで一緒に考えること」について概ね好評であり、ワークのディスカッションも活発に実施された。 | <p>子ども・若者が市政参加の当事者意識を持ち、主体的な意見を持った上で市政参加に関するアイデア・意見交換をするという目的においては、参加者同士の交流の時間が確保できるワークショップ形式が適していると思われる。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> ワークショップ参加後のアンケートのコメントでは、ワークショップの内容に対して、アイデア発表をもとにした参加者同士での議論や実際の市への意見提出などの要望があった。 | <p>ワークショップを実施する際は開催時間を延ばすことや、より中長期のプロジェクトとして同一の参加者による継続的なワークショップを複数回に分けて取り組むなどに需要があると考えられる。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> ウェルビーイングの理解度が参加前後で比較すると「よく理解できた」「ある程度理解できた」が46ポイント上昇し100%となった。 ワークショップ参加後のアンケートでは参加してよかった理由として「ウェルビーイングへの理解が深まった」との回答が最多。 | <p>ウェルビーイングカードという媒体を用いることで、ウェルビーイング理解促進は有効であることが確認できた。また、アイデアの傾向から、ウェルビーイングをもとに市政に対する意見を考えることで、より主体性のある意見が出るが見受けられる。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> ワークショップでの参加前アンケートでは、参加のきっかけとして特典を選択した回答者は全体の2割弱に留まった。 | <p>意識調査の結果と比較すると、ワークショップ参加者層は特典を期待する割合が低いことが分かった。ただし、今回は参加者数が10名という限られた結果となるため、参加者の誘引に特典が効果的かについては規模・金額・アプローチ先などの観点で今後の検証が望ましい。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> 募集人数の定員は30名だったが、申込人数は17名、当日の参加者は10名にとどまり、参加人数が少なかった。 | <p>応募者・参加者が振るわなかった理由の考察として、開催日が受験準備時期と重なり、参加を見送った可能性が挙げられる。また、参加しやすい雰囲気をも十分に伝えられなかったことや参加者の生活や学びとどのように結びつくのかが分かりにくかったことも一因と考えられる。</p> <p>今後の改善策としては、学校授業に市政参加につながるワークショップを取り入れ(例:ウェルビーイング×デザイン思考)、募集段階で学校授業との関連性をアピールしたり、日常生活とのつながりを具体的に例示するなど参加者が「自分ごと」として捉えられる工夫が求められる。</p> |



第7章 本研究事業の結果に対する考察の総論

子ども・若者への意見聴取手法に関する改善施策例

| | 意識調査・実証実験から見える実態・傾向 | 活用に向けた施策例 |
|-------------------------|---|---|
| <p>交流・意見交換の機会創出</p> | <ul style="list-style-type: none"> ワークショップの参加者のアイデアから「対話により意見を深めるワークショップ」や「市の職員との対話会」などを求めるものが複数見られる。 先行研究では意見形成の練習の場も必要という有識者コメントが見られる。 | <p>市民同士の交流や意見交換の場としてのワークショップや、市民と市役所職員の対話による意見発信の機会の創出などが必要と思われる。また、ワークショップへの参加は、意見形成の練習の場にもなり、市政参加の促進を図る面でも有効であると思われる。</p> |
| <p>オンラインでの意見伝達手段の充実</p> | <ul style="list-style-type: none"> 市民向け意識調査では、19-29歳の層では子ども・若者の市政参加がより参加しやすくなる手段について、「オンラインやSNSでの意見提示」を選択している。 同じく意識調査では、意見伝達手段としての問合せフォームの認知度は6割近くとなる一方、パブリックコメントについては4割程度に留まった。 ワークショップのアイデアからも、問合せフォームやSNSの活用がアイデアとして挙げられている。 | <p>オンラインによる意見伝達手段は、認知度は高いものの、利用されていない現状があるため、身近さ手軽さを感じられるよう、表現やデザイン等の工夫により利用のハードルを下げたうえで、一層の周知を図る必要があると思われる。</p> <p>また、より声を上げやすくなるよう、対象の世代が利用しているSNS、チャットツールを意見伝達手段としてより活用することの需要もあると思われる。</p> |
| <p>ターゲットに応じた参加手法の提供</p> | <ul style="list-style-type: none"> 意識調査及び実証実験ともに、周知方法は概ね同一としたものの、意識調査の回答者数に比べ、実証実験の参加申込者数は、大幅に少ない結果となった。 日時・会場が指定されたワークショップ形式の市政参加は、時間的な制約を受けるとともに、関心の低い子ども・若者にとっては、参加のハードルが高く敬遠される傾向があると推測される。 今回の実証実験の参加者の中には、ほかの市政参加の機会を経験したことがあるなど、市政への関心が高い傾向がある。 | <ul style="list-style-type: none"> 日頃から市政に興味・関心を持つ市民に対しては、ワークショップ形式で意見を交換できる機会が有用である。 市政に興味・関心が薄い市民(サイレントマジョリティ)の意見聴取や市政参加を促進するためには、SNSやオンラインを活用したアンケート形式の検討や、参加しやすいテーマの設定が重要である。 子ども・若者同士のネットワークを活用し、市政に興味・関心を持つ市民から友達など身近な人への波及を働きかけることも有効である。 |

子ども・若者への情報発信に関するポイント・改善例

| | 意識調査・実証実験から見える実態・傾向 | 考察 |
|---------------|--|--|
| 市報の有効性 | <ul style="list-style-type: none"> ワークショップ参加者のうち、ワークショップを知ったきっかけに「市報」を挙げた割合が全体の半数ほどだった。また、市政への関心も高い参加者が大半だった。 | <p>市政に関心が高く、イベント等への参加意欲がある子ども・若者に対するイベントや取組の周知として、市報が比較的有效であると考えられる。</p> |
| 学校経由での周知の有効性 | <ul style="list-style-type: none"> 意識調査の結果から、小学生、中学生に対しては学校からのお知らせなど、学校経由での周知に大きな効果があることが分かった。 ワークショップ参加者にもその傾向がみられ、「学校からのお知らせならば確認する」との声もあった。 | <p>今後も小学生、中学生へ向けての周知は学校と連携しての周知が効果的であるということが改めて確認できた。</p> |
| 情報伝達ツールの選定・強化 | <ul style="list-style-type: none"> 小学生・中学生の回答数に比べ、16-29歳の年代からの回答数が6分の1ほどと課題があり、情報を入手しやすい手段も年代ごとに違う。 19-29歳ではまちづくり活動を敬遠する理由として「毎日忙しいから」という回答7割弱と、全体の3割と比べ大きく上回っている。 | <p>特に16-18歳・19-29歳については、各年代の傾向に合致した手段(LINE、Instagramなど)での周知の強化が必要と考えられる。</p> <p>また、忙しさによる市政参加の障壁を除くため、子ども・若者に対し情報発信をする場合はオンラインでの開催や時間的制約の少ないSNSの活用が重視されると思われる。</p> |
| 提供する情報の工夫 | <ul style="list-style-type: none"> 市政参加を促進する手法では、19-29歳の6割近くがイベントやまちづくり活動についてのわかりやすい情報提供を求めている。 | <p>現状の情報発信に課題があり、情報不足や情報のわかりにくさが市政参加の障壁になっていると考えられる。そのため、情報発信をする際には必要な人に必要な情報が届くよう、ハッシュタグやセグメントを活用するなど、当事者の興味・関心をとらえた情報発信の工夫が必要である。</p> |

子ども・若者の市政参加促進に向けた検討すべき施策例

| アイデア・意見 | | 活用に向けた施策例 |
|---------------------|--|--|
| 受動的状態の子ども・若者へのアプローチ | <ul style="list-style-type: none"> ワークショップ参加者からのコメントで、市政に対する関心を持ったきっかけとして学校生活でまちづくりをテーマとして扱ったことや市役所職員が学校を来訪したことを挙げているなど、受動的なきっかけがワークショップ参加の遠因となっている意見が見られた。 また、ワークショップ参加者からのアイデアでは意見を伝えやすくなる方法として「親しみやすさ」「話しやすさ」を重視する傾向がみられる。 | <p>子ども・若者が市政に関心を持つきっかけとして、受動的な状態である子ども・若者に対して、市役所側からまちづくり活動などに対して考えたり、調べたりする場を提供するなどの働きかけが有効と思われる。そうすることで、まちづくりや市政参加が日常化されている状態を目指せると良い。</p> <p>また、市役所からの働きかけだけではなく、既に市政参加意欲の高い市民(例:ワークショップ参加者等)から周囲の市民を誘ったり、ワークショップの雰囲気や体験内容を共有したりすることも「親しみやすさ」という観点から有効なアプローチと考えられる。</p> |
| 意見に対するフィードバック | <ul style="list-style-type: none"> 市民向け意識調査のコメントでは「市民の意見がどのように生かされているか可視化してほしい」との意見が見られる。また、意識調査のデータによると市政参加意欲が高い方がよりフィードバックを求めていることが分かる。 ワークショップ参加後アンケートのコメントにも同様の意見が見られる。 また、他自治体の先行事例でも、子どもたちの意見に対する自治体の取組結果などを広報誌で公開することで、意見が政策に活用されている実感を育成している。 | <p>市報などを活用した意見に対するフィードバックや、対話会等、市役所側と子ども・若者が双方向で意見交換できる場の創出が必要と思われる。</p> |